

随想 「良い歩道とは何か？」

宮地 信良

江戸川大学国立公園研究所・研究員

1. はじめに

自然公園内の歩道をはじめとして、レクリエーションのための歩道は、国、都道府県、あるいは市町村といった公的セクターが計画・整備し、公的セクターあるいはその意を受けた第三セクター等が管理・運営するという形が一般的である。ハイキング道や最近の登山道は、役所の設計マニュアルに合わせたかなり人工的な作りのものが多く、利用者から「歩くと疲れる」「自然との一体感が感じられない」という評価を受けることも多い。

2. 「歩きやすい」「歩きにくい」を知っている歩道づくり

それでは良い歩道とは何か？

公的整備で最も一般的な整備方針は、「安全」「快適」「わかりやすく」ということであろうが、ここで紹介する四国徳島県の遍路道の再整備事業（「四国いやしのみち」事業の神山町部分）の例では「地味に」「整備はほどほどに」という考え方が強く打ち出されている。公共が整備した「四国のみち」の階段とボランティアが整備した石積階段を写真で比較してみると、

整備の考え方の違いが良く分かる。（写真）

この事業は、地域住民が主導し、行政がサポートするという形で計画・整備から管理までを行う事業である。何と休憩所建設や石段の歩道づくりまでボランティア活動として行っている場所もある。休憩所は大工の腕のある人が、歩道の石段づくりは石積み経験の豊富な人が、標識づくりは…というように、住民が自らの得意な分野の技術を生かして活動する形をとっている。徳島県の山間部は谷が深い地形の場所が多く、高い河岸段丘上に住宅や農地があることが多い。このため、長年自分達で石を積んで耕地や道の保全を行ってきた経験があり、多くの住民が石積み技術を持っているため道に石積階段をつくるボランティア活動が可能になったのである。特に階段は疲れやすいため一般的に不評であり、台湾のある国立公園では、当該国立公園管理事務所の所長さえ階段の横の斜面を歩いていたほどである。さらに、階段の蹴上げが高すぎる、蹴上げ+踏み面のサイズが適当でないため片足ばかり使う、必要のないところまで階段を設けているなど、不適切な設計のものも多く、階段の不評に輪をかけている。「四国いやしのみち」事業では、石積階段ではなるべく蹴上げを低く、ステップを不規則な形にするなどのつくり方をしていて、利用者の評判は良い。住民



「四国のみち」事業で整備された擬木階段



「四国いやしのみち」の石積階段

は「地味に」「ほどほどに」整備した方が歩きやすい、ということを経験的に知っているのである。

歩く道づくりは、実際に歩く経験が豊富な人の意見が反映されなければなかなかうまくゆかない。「四国いやしのみち」では、多くの遍路の声を知っている関係者がこの声を真摯に受け止め、議論を徹底して行い、その結果を反映させた道づくりをしたのである。「歩きやすい」「疲れにくい」ということが強く求められる遍路道から学ぶべきことは多いのではないだろうか。神山町の「四国いやしのみち」についての議論の場である「井戸端会議」では、公的セクターではなかなか見られない、基本的なあるいはディテールの重要性にこだわった議論が展開されていた。少し長いですが、その一部をここで紹介しておきたい。

- 四国のみちとしていろんなものを入れてくれた。例えばここなら石ころを入れてくれた。それはありがたいが、歩く人にとっては邪魔になるらしい。段々になっているところも次第に(蹴上げの)幅が高くなっているの、通りにくいという話を聞く。昔は、段々などなく、路面そのものだった。
- 神山町は昔からの道もだいぶ距離が残っている。擬木の段は、同じ方向の足で降りるので、とても疲れる。
- 「空海のみち」として、歩きにくいということも一つの特徴として値打ちがあるのではないかと思う。整備しすぎると値打ちが下がる。
- きれいなみちばかりでなく、昔の自然の道があっても良いと思う。ところによっては手を加えても良いと思う。少しなら手を加えても良い。
- 直すのは危険なところと、「手すり」は鉄はやめて、自然にとけ込むようなものにしてほしい。とってつけたようなものは避けたい。
- 整備する行政側と地元住民の「道の整備」のイメージが同じものでなければいけないと思う。危険な場所と言っても、行政が思う場所と地元住民が思う場所では違いが出てくると思う。そういう違いをこのような話し合いで、見つけていけたら良いと思う。
- 「手すり」よりも、滑らないように地面を整備して欲しい。「空海のみち」に「手すり」があると歩いている人は違和感を感じるのではないかと思う。少しくらいなら良いと思う。
- 70～80代の人々が3分の1くらい歩いている。お年寄りが多く、転げたりすると危険なので、安全対策として「手すり」は必要だと思う。転

げると谷底まで滑り落ちるような場所もある。

- 石段があると歩きにくい場所は、段の横にコンクリートのスロープ部を40～50cmくらいつけると歩きやすいのではないかと思う。足が不自由な人にとっては、そんなスロープがあったほうが良いのではないか。そして、段の横に「手すり」があれば良い。
- 段を止めている丸太の擬木を縦の杭で止めている。段を止めている擬木の頭が上に出ているので、歩きにくいと思う。その擬木を半分にするか歩きやすいのではないか。少し勾配をつけると歩きやすいのではないかと思う。
- 古道の石というのは、いろんな人が何回も歩いて踏んでいるので、石が優しい。それが、古道の石の魅力である。山のトゲが刺さったような石は、表情が厳しい。しかし、ここの石は優しい。それは、おへんろさんが何千人と歩いているので、ツルツルしている。何千人のおへんろさんがここを通過して行ったのだなというようなことを考えさせられる道づくり、「ちびるデザイン」を考えている。

3. ソフトとハードを連動させた歩道づくり

もうひとつ、岐阜県高山市(旧丹生川村地区)に整備された五色ヶ原歩道について紹介したい。これは平成13年度～15年度に行われた「乗鞍山麓五色ヶ原学術調査」によって、植物社会学者の宮脇昭氏から「五色ヶ原は植生、景観、水等の面で大変優れた自然である」と高く評価されたことをきっかけに、五色ヶ原の自然を保護し、かつ地元が潤う活用方法として樹てられた「五色ヶ原歩道構想」に基づくものである。「利便性ではなく不便さを提供する」という基本コンセプトの下、誰でもが自由に利用できる一般的な歩道ではなく、「地元ガイドによる有料ツアーのみが利用可能であり、幅員を小さくするため一方通行とし、1日の入山者数を制限する」という大胆な利用方針を前提とした歩道づくりの構想である。

その歩道のつくり方は、一般的な設計マニュアルによるものとは異なっている。手づくりによる控え目で自然に溶け込むような構造・工法とするため、歩道整備の材料は外部から持ち込まず、原則として現場のものを利用して手づくりで行っている。一般的な交互通行の歩道は幅員を広く取ることになり、山側の切土を行わざるを得ず、その結果自然を壊し維持管理を難しくする大きな原因ともなっているため、1人が通れる最小



ゲートのある五色ヶ原歩道入口



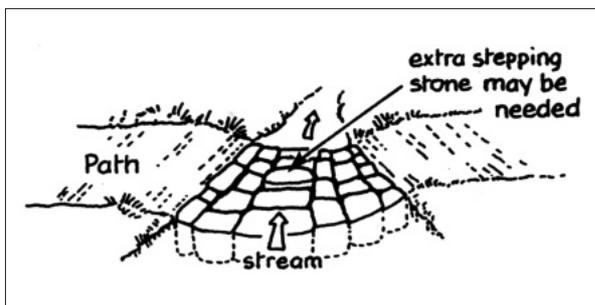
階段の代わりにロープを設置

限の幅員に抑えるため全線を一方通行の歩道とした。評判の悪い階段は最小限とし、急な場所には代わりにロープを設置して安全を確保している。また一方通行を可能にさせ、自然の保護や安全確保のためにも地元のガイドによるツアー利用に限定し、1日1コース当たり利用者数を1日150人までに制限する、といった

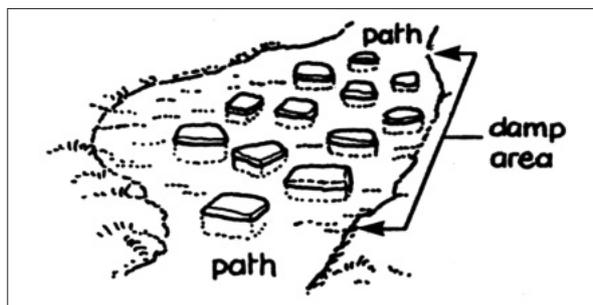
ソフトとハードを連動させて考えていることが大きな特徴である。

日本では、登山道以外で手づくりの道を歩く機会は意外と少ないが、例えばイギリスではBTCV等の民間団体が手づくりの道づくりを盛んに行っており、そのための施設と維持管理のマニュアル書「Footpaths,a

(英国BTCVのマニュアルから) ■水の流れを渡る



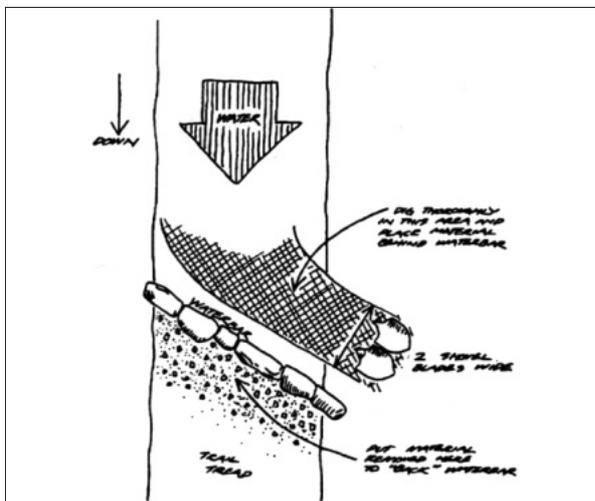
歩道をアーチ状に低くして石を張りつける方法 歩巾に合わせて踏石を据えることを忘れないように。



歩道の湿った部分に踏石をいくつか置くだけでも場合もある。歩道巾が広い時は行き違いができるように。

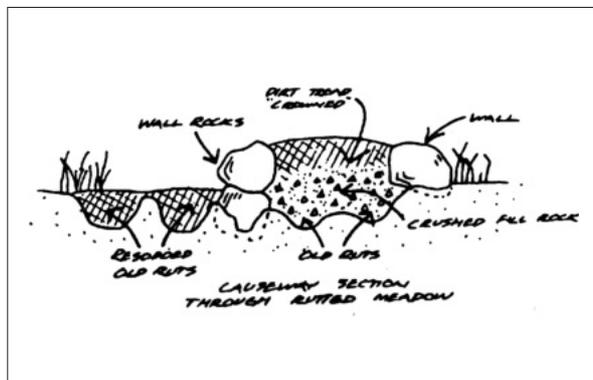
(米国の歩道整備・維持マニュアルから)

■歩道上の水抜き



排水溝の縁石は道に直角ではなく斜めに据えている

■盛土歩道



基本的に英国の同様の例と同じ。これは縁石を使っている。

practical handbook, BTCV」が発刊されている。このマニュアルには、様々な手づくり歩道施設やそのメンテナンスの詳細な作業手順が紹介されている。またアメリカでも「A HANDBOOK ON TRAIL BUILDING and MAINTENANCE」等の参考書がある。これらの中から内容の一部を前ページで紹介した。

日本では近年、近自然工法などの技術が広まりつつあるものの、一般的には手づくり歩道についてマニュアルさえ見当たらない状況である。我が国でも是非ともこのような手づくり歩道や、その維持管理技術の開発・普及が望まれる。

4. 「利用を熟知した民との協働」が道を開くかもしれない

先に挙げた2つの歩道の事例では、いずれも利用についての明確なイメージを持ち、それに沿った整備が行われていることが特徴と言える。五色ヶ原では「自然を体感してほしい」ということから、ガイドツアーによる自然に溶け込むような歩道づくり、四国いやしのみちでは遍路が歩きやすい道づくり、ということを目標に歩道の整備と管理を官民協働で行っている。従来自然公園の歩道づくりは、「自然探勝」「自然観察」といった漠然としたイメージのみで整備を考えるケースが多かったと思われるが、本例のように具体的な利用を思い描き、そのための整備の目標をはっきりイ

メージする、すなわち利用から発想した歩道づくりを行うことが、良い歩道づくりに重要だと思われる。

歩くことには素人である場合が多い行政担当者が単独で作るのではなく、民間との協働、あるいは利用者の参画、民間主体の事業計画等の手法によって、利用のイメージとみちづくりに必要な条件を十分議論し、それを明確にしたうえで歩道作りのノウハウや設計に具体化することによって、歩道の質を高めることができるのではないだろうか。

《参考文献》

- 『乗鞍山麓五色ヶ原学術調査報告書』編集：(財)日本ナショナルトラスト 岐阜県丹生川村 2004
- 『五色ヶ原リーフレット』岐阜県丹生川村 2004
- 『徳島県歴史の道整備活用総合計画事例報告書(神山町編)』徳島県教育委員会2003
- 『最後まで残った空海の道』新四国のみち石積みボランティア
- 『Footpaths, a practical handbook』Elizabeth Agate, BTCV 1996
- 『A HANDBOOK ON TRAIL BUILDING and MAINTENANCE』Stephen S Griswold, Sequoia National History Association ,National Park Service 1996